論文の和文要旨	
論文題目	アニメキャラクターの性格類型ごとの言葉づかいの特徴
氏名	佐藤　茉奈花

わたしたちは日常生活において，さまざまなに言葉づかいを変えながらコミュニケーションをとっている．こうした言葉づかいの使い分けには２つの側面があると考えられる．まず，相手が友人なのか上司なのかといった相手や場面に応じた使い分けである．もう１つが，相手に優しい人として見られたいといった人物像の演出を意識した使い分けである．本研究の焦点は後者にあり，「どういう言葉づかいをすれば，自分の演出したい人物像に結びつくのか」という問いがこの研究の出発点である．

人物像というのは性別や職業，外見的特徴など，さまざまな要素から構成されるが，本研究ではその中でも中核的要素である「性格」に注目する．ただし，現実のコミュニケーションを分析対象とすると，性格以外のさまざまな要因が言葉づかいに影響を及ぼすため，性格と言葉づかいの結びつきをとらえるのは難しく，なかなか研究が進んでいない現状がある．一方で，フィクション作品に登場するキャラクターは，性格を含む人物像が明確に設定されている場合が多く，それに応じた言葉づかいが製作者によって意図的に選択されるため，その特徴がとらえやすいと考えられる．

これらの背景を踏まえ，本研究では，アニメ作品に登場するキャラクターを対象に，性格ごとの言葉づかいの特徴を明らかにすること，そして，その知見をもとに，自分の演出したい性格に基づく言葉づかいの選択に関する示唆を得ることを目的とする．

本論文は８章からなる．以下，各章の要点を述べる．

第１章では，言葉づかいによる自己演出における「性格」の重要性を位置づけ，本研究の目的を提示した．

第 2 章では，性格と言葉づかいに関する先行研究と，キャラクターの言葉づかいに焦点を当てた研究について整理し，本研究の位置づけを明らかにした．また，語彙レベル，文・談話レベル，音声レベルの３つの観点から多角的に分析をおこなうことを示した．

第３章では，本研究で用いる性格類型の枠組みである「新版東大式エゴグラム第２版（新版 TEG II）」について，その理論的背景と本研究での援用方法について述べた．

第４章から６章は分析について述べた．第４章は語彙レベルの分析，第５章は文・談話レベルの分析，第６章は音声レベルの分析をおこなった．

まず，第４章と第５章では，『ラブライブ！School idol project』『BanG Dream！』『五等分の花嫁』の３つのテレビアニメシリーズ作品を対象に，キャラクターのセリフをテキストデータ化し分析をおこなった．分析対象作品に登場するキャラクターについて，新版 TEG II に基づいて性格類型を判定した結果，各自我状態が最も顕著にあらわれる「優位型」に分類されるキャラクターが多くみられたため，各優位型（CP 優位型，NP 優位型，

A 優位型，FC 優位型，AC 優位型）に分類された 29 人のキャラクターを分析対象とすることとした．

第 4 章では，各キャラクターのセリフを形態素解析し，対数尤度比（Log Likelihood Ratio：LLR）に基づいて性格類型ごとの特徴語を抽出した．その結果，【CP 優位型】では「リーダー」などの役割や，「意識」といった抽象的な概念，「所為」といった評価，「ふん」といった感情に関する語が特徴語として抽出された．また，他者に行動を要請する「為さる」や，「何」「なんて」など相手を非難する際に用いられる語，「わ」「よ」「かしら」といった女性文末詞が抽出された．また，「あんた」「あなた」といった二人称代名詞，「です」「ます」といった丁寧体をつくる助動詞が抽出されており，相手と距離をとるような語が多くみられた．【NP 優位型】では，「良い」などの評価，「あはは」といった感情，「御免」といった関係調整，「ほら」「こら」といった呼びかけ，「渡す」「上げる」といった相手へ何か提供する行為に関する語が抽出された．また，同意や共感をあらわす終助詞「ね」や，断定をやわらげる終助詞「な」「じゃん」が抽出された．【A 優位型】では，抽象的な概念に関する「事」「訳」や，格助詞「を」「に」，係助詞「は」といった基本的な助詞が抽出されていた．しかし，A 優位型は抽出された特徴語が少なく，語彙レベルでは際立った特徴がみられなかった．【FC 優位型】では，「皆」「一緒」といった集団，「海」「学校」といった具体的な事柄，「酷い」「凄い」といった評価，「わあ」などの感情，「御早う」などの関係調整，「うん」といった応答，「ねえ」などの呼びかけ，「頑張る」などの行動に関する語も抽出されていた．また，「ちゃん」「さん」といった人を呼ぶ際に使われる敬称や，「って」「ちゃう」のようなくだけた表現も特徴語となっていた．【AC 優位型】では，「大変」といった評価，「緊張」や言い淀みの表現「えーと」や「つっかえ」などの感情，「助ける」といった他者への提供に関する語が特徴語となっていた．しかし，A 優位型と同様，抽出された特徴語が少なく，あまり特徴がみられなかった．

第 5 章では，キャラクターのセリフに対して 1 発話ごとに発話機能の判定を行い，性格類型ごとの発話機能の使用傾向と，先行発話に対する応答パターンを分析した．その結果，【CP 優位型】では，〈否定〉〈見解〉〈単独行為要求〉の使用が多く，相手に対して是正を促す，行動を求めるといった主導的な姿勢があらわれていた．応答パターンに関しても〈否定〉が多く，対立的にふるまう傾向が特徴的であった．【NP 優位型】では，〈質問〉や〈肯定〉を通じて相手の意向や状況を引き出し協調的に応じる発話が目立った．応答パターンでも〈肯定〉が多く，受容的な応答が特徴的であった．【A 優位型】では，〈陳述〉〈見解〉〈質問〉の使用が多く，状況を整理しながら論理的に対話を展開し，感情的な発話を避けるという特徴がみられた．応答パターンでも，他者の働きかけを受けて〈見解〉で自身の立場を表明したり，〈反応〉で即時的な応答を避けるような発話機能が多く用いられていた．【FC 優位型】は，〈感情〉〈肯定〉〈共同行為要求〉などを多く用い，ポジティブな感情や評価を率直に表現しながら，他者との関係構築や場の活性化を目的とした発話を多用する傾向があった．応答パターンでも相手の発話に対して〈肯定〉で応答し，

相手に共感的，協調的に応じる場面が多くみられた．【AC 優位型】は〈陳述〉〈反応〉〈肯定〉の使用が多く，自らの意見や評価を前面に出すのではなく，相手の発言を受け止めたり，事実や状況を共有したりする発話が多く確認された．応答パターンでは，明快な応答を避け，〈反応〉で言い淀みを含んだ控えめな応答を多用するなど，相手との関わり方への慎重さがうかがえる点が特徴的であった．

第 6 章では，プロの女性声優 1 名に，同一の発話内容について，各優位型の性格特性に沿って性格設定をしたキャラクターを演じ分けてもらって収録した演技音声データをもとに，音響分析ソフト Praat を用いてピッチや文末イントネーション，時間長について，性格類型ごとの音声的特徴を分析した．その結果，【CP 優位型】は抑揚が大きく，【NP 優位型】は文末に〈疑問型上昇調〉を多用しながら，遅いテンポで長いポーズを取りながらゆっくりと話すという特徴がみられた．【A 優位型】は，低い声で抑揚がなく，文末もほとんど上昇・下降がない〈平坦調〉や〈無音調〉が多く使われていた．また，テンポは速いがポーズは長くとられていて，他の性格類型と比べて特徴的な話し方となっていた．【FC 優位型】は，高い声で抑揚も大きく，ポーズを挟まずに一息で早口で話すという特徴がみられた．【AC 優位型】では特に遠慮しがちな性格特性を演出する場合に，声の高さや抑揚，テンポ，ポーズもの調整が確認された．

第 7 章では，総合的考察として，第 4 章から 6 章までの分析結果をもとに，性格類型ごとにみられた語彙レベル，文・談話レベル，音声レベルにみられた特徴を整理し，性格類型間の比較を通じて，どの側面がその性格類型の言葉づかいを演出するうえで大きな役割を果たしているのかを検討した．その結果，【CP 優位型】【NP 優位型】【FC 優位型】は 3 つの側面の特徴が互いに補い合うことで，一貫した“その性格らしさ”が強く演出されるという特徴があり，これらを「補強型」と位置付けた．一方，A 優位型は主に音声面での特徴が際立つ「音声主導型」，AC は発話機能での特徴が際立つ「発話機能主導型」と位置づけられ，性格類型によって言葉づかいのどの側面が“その性格らしさ”を演出するのに中心的役割を果たすかが異なることが明らかになった．そして，得られた知見を応用し，言葉づかいによる性格演出の方法を具体的に提示した．

第 8 章では，本研究の結論をまとめたうえで，限界点と今後の課題，展望について述べた．本研究では，語彙，発話機能，音声という 3 つの側面から，性格類型ごとの言葉づかいの特徴を明らかにした．その結果，これまで社会的属性に基づく分析が中心だったキャラクターの言葉づかいの研究に対して，言葉づかいのバリエーションは性格という内面的な要因によっても生じるという新しい視点を提示することができた．そして，語彙，発話機能，音声の分析結果を組み合わせて，各性格類型らしい発話を具体的に生成できることを示した．このことから，言葉づかいによる性格の自己演出という点において，実践的な示唆を得ることができた．つまり，本研究は，性格が言葉づかいにどうあらわれ，また言葉づかいによって性格をどう演出できるのかを明らかにしたといえる．

多様性や個性が重視される現代において，本研究のような言葉づかいの多様なあり方

を捉える研究は今後ますます重要性が高まっていく．本研究の知見である，性格に応じた言葉の使い分けを解明することは，実践的な言葉づかいの選択や自己演出の方法を考える上でも有用であり，日本語教育やコミュニケーション教育，さらには対話型 AI の設計などにも応用が可能であると考えられる．